



エリシャ National Shrine of Saint Jude

エリシャの預言者の生涯は、師エリヤを天に見送ったあと、エリヤの残した外套を手にしてヨルダン川の水を打って、分け、エリコへ帰る道を開いた奇跡からスタートしました。この様子を見ていた多くの預言者はエリシャを指導者として仰ぎ、従いました。エリシャには、後継者としての自覚と、人を受容する柔軟な温和な姿勢があったためです。

エリコに来ると町民は、「御覧のように、この町は住むには良いのですが、水が悪く、土地は不毛です」と訴えた。彼は、「新しい器を持って来て、それに塩を入れなさい」と命じた。人々が持って来ると、彼は水の源に出かけて行って塩を投げ込み、「主はこう言われる。『わたしはこの水を清めた。もはやここから死も不毛も起

こらない』」と言った。エリシャの告げた言葉のとおり、水は清くなって今日に至っている。(列下2:19-22)と記されているように、エリコの水を清めました。今もエリシャの泉として、記念に残されています。

モアブ人がイスラエルを攻めてきた時、ユダとイスラエル連合軍は迂回に時間を費やし、部隊と家畜のための飲み水が底を尽きました。その時ユダの王ヨシャファトに依頼を受け、エリシャは神の言葉を告げました。

「主はこう言われる。『この涸れ谷に次々と堀を造りなさい。』主がこう言われるからである。『風もなく、雨もないのに、この涸れ谷に水が溢れ、あなたたちは家畜や荷役の動物と共にそれを飲む。』(列下3:16-17)

予言のように、涸れ谷に掘った堀に水が溢れ、彼らはそれを飲んで、助かりました。更にこの堀の水が朝日に反射し、血の海のように見え、モアブ人は同土打ちと誤解し、攻め入りました。体力を回復していたイスラエル軍はこれを迎え撃ち、勝利しました。

イスラエルと何度も戦火を交えたアラムもイスラエルに恭順な頃のことです。アラムの王の軍司令官、ナアマンは主君に重んじられていましたが、重い皮膚病を患っていました。ナアマンはイスラエルを攻めた時に、一人の少女を捕虜として連れて来ていました。少女はナアマンの妻の召使いとなって働いていましたが、彼女は故国のエリシャを思い出し、女主人に言いました。「御主人様がサマリヤの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえるでしょうに。」(列下5:3)なんと健気な少女でしょう。逆境にありながら主人に忠実に仕え、助かってほしいと願って、彼女の心に残っていたエリシャの素晴らしさを伝えています。ナアマンの家族にも彼女にそうさせる何かがあったのでしょう。アラムの王はこれを知って、ナアマンを癒してほしいとイスラエルに送りました。イスラエルの王はこれは言いがかりだと激怒しましたが、エリシャは「なぜあなたは衣を裂いたりしたのですか。その男をわたしのところによこしてください。彼はイスラエルに預言者がいることを知るでしょう。」(列下5:8)と言って、ナアマンを迎えました。けれどもナアマンには会わず、言葉だけを伝えました。

「ヨルダン川に行って七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります。」(列下5:10)

ナアマンはエリシャが自ら出て来て、彼の前に立ち、彼の神、主の名を呼び、患部の上で手を動かし、皮膚病をいやしてくれるものと思っていたので、憤慨し、帰ろうとしますが、彼の家来たちにいさめられ、その言葉どおりに、ヨルダン川の水で洗ったところ、重い皮膚病は完治したのです。

ナアマンは随員全員を連れて神の人のところに引き返し、その前に来て立って言いました。

「イスラエルのほか、この世界のどこにも神はおられないことが分かりました。今この僕からの贈り物をお受け取りください。」(列下5:15)

エリシャは贈り物を受け取ることは絶対にしませんでした。ただ、イスラエルに神の言葉を伝える預言者がいること、その言葉を信じることを願ったのです。イスラエル人よりも、一人の異邦人のほうが、預言者の言葉を信じ、神の祝福が異邦人にも与えられたことを記しているのです。

水を通して、さまざまな奇跡を行ったエリシャは、澄んだ水、清らかな水のような目をもって、広く国中を見わたし、外敵の計略を何度も見抜き、イスラエルを敵の手から守っているのです。エリシャはたとえ勝利しても、報復を禁じ、平和裏に事を治めさせました。

エリシャは答えた。「打ち殺してはならない。あなたは捕虜とした者を剣と弓で打ち殺すのか。彼らにパンと水を与えて食事をさせ、彼らの主君のもとに行かせなさい。」(列下6:22)